

ITエンジニア、「Oracle PRIMAVERA年次カンファレンス」を開催 業界別テンプレートに加え、アドオンソフトを紹介

ITエンジニアリングは去る3月12日、「Oracle PRIMAVERA年次カンファレンス」を東京コンファレンスセンター・品川で開催した。「Oracle PRIMAVERA」は、EPM(エンタープライズ・プロジェクト・マネジメント)ソリューションの世界的なデファクトスタンダードになったが、わが国で販売代理店となっているITエンジニアリングでは、今年1月に業界別テンプレートをリリース、さらに今回の年次カンファレンスではアドオンソフトのリリースも発表した。EPMソリューションでは、一歩先を行く事業展開をアピールしている。

業界別テンプレートに続き、 アドオンソフトをリリース

今年1月にリリースされた、業界別テンプレートはエンジニアリング業界向けの「ite-PRIMAVERA-ENG」、IT業界向けの「ite-PRIMAVERA-IT」、そして石油・化学・電力など、装置産業の「オペレーション&メンテナンス」向けの「ite-PRIMAVERA-OM」の3種類。テンプレートを販売した目的は、業界ごとに基本となるテンプレートを作成し、導入の迅速化を図ること。これが可能になった背景には、ITエンジニアリングが長年に渡る「PRIMAVERA」事業を通して培ったユーザーニーズの体系化がある。これを基に、ユーザーニーズを業界別に把握し、テンプレートを作成した。

そして今回の年次カンファレンスを機会に発表されたのが、プロジェクト進捗更新支援システム「i-PUS」とワークフローエンジンの「i-DaeC」。いずれも「PRIMAVERA」のアドオンソフトとしてITエンジニアリングが開発しリリースするもので、ユーザーの生産性を向上する新製品として期待される。

注目のアドオン ソフト「i-PUS」 「i-DaeC」

「i-PUS」は、「Oracle PRIMAVERA P6」と連動し、P6で管理しているアクティビティデータの進捗・実績、そして今後の予測の分散入力を可能にするツールだ。

プロジェクト管理を行う上で重要なのが「明確な計画」と「実績の把握」だが、これを実現するには、効率的な実績収集の仕組みが無いと、計画に対する実績が収集されずに、作成した計画が正しく進捗しているかを判断できなくなる。こうしたニーズに応える形で開発されたアドオンソフトで、異なる場所で作業を行うチームメンバーが、ネットワーク経由でプロジェクトデータベースに直接接続し、関連情報の送信を行うことができる。報告された実績およびアクティビティステータスの情報に基づいて、プロジェクトマネージャーは、プロジェクトを更新して適切な意志決定ができる。

「i-PUS」と「Oracle PRIMAVERA P6」を連動して使うことにより、①実績収集負荷の軽減、②リアルタイムに予実績を確認できる、③スケジュールフォアキャストやEV予測の活用、などの「PM/スケジュールコントローラ」のメリットを享受できる。

ワークフローエンジン「i-DaeC」の特徴は、①ユーザー自身による容易なカスタマイズ、②ワークフローのみならず様々な業務に応用可能、③高いコストパフォーマンスの実現。

ウェブ画面が簡単に作れ、変化に迅速に対応できる。またプログラミ



ITエンジニアリング 年次カンファレンス

ングが不要なため、開発ベンダーも必要なく、ユーザー独自の理想を形にできる。

具体的には、個人から特定の個人または部署にデータを回覧できるため、意志決定の迅速化、業務の見える化、コンプライアンス・統制力の強化、などが可能になる。

また多数の関係者から情報収集できるが、これにより集計の手間の軽減、二重入力の軽減が可能になる。

さらに属人的な業務をシステム化できる。これは、各種データベースのバックアップやシステムのサーバのリポートなどの定型業務を「i-DaeC」に定義することで属人的な業務ではなくなる。

ITエンジニアリングでは、今年初めの業界別テンプレートに加え、3月のアドオンソフトのリリースと、「Oracle PRIMAVERA」によるEPM事業が幅を持ち始めている。プロジェクトを生業とする千代田化工建設を親会社に持つだけに、勘所を捉えた新たなソリューションがリリースされた。